



## 7月全校朝会の校長講話「桐生祇園祭」



- ◆ 皆さんの中にも楽しみにしている人が多いのではないかと思います。今年も、8月の4日・5日・6日(金・土・日)の3日間、「桐生八木節まつり」が行われます。「桐生八木節まつり」は、昭和63年に全日本八木節競演大会が行われたのをきっかけに、この名前に変更されましたが、それまでは、「桐生まつり」という名前で呼ばれていました。平成32年には、日本で2回目の東京オリンピックが開催されますが、1回目の東京オリンピックが開催された昭和39年に、桐生市の色々なお祭り(例えば、春の文化祭、夏の祇園祭り、七夕祭り、花火大会、秋の桐生祭り、体育祭など)を一つにまとめて行われたのが、「第1回桐生まつり」でした。
- ◆ 今、「夏の祇園祭り」と言いましたが、「桐生まつり」や「桐生八木節まつり」のもとになっているのは、【桐生祇園祭(きりゅうぎおんまつり)】というお祭りで、実はこのお祭りは「桐生八木節まつり」と一緒に、今でも本町通りで行われています。これが、そのポスターです。この【桐生祇園祭】は、皆さんが住んでいる北小地区とたいへん関係が深いお祭りで、このお祭りのおおもとは、今から361年前に、北小地区である本町三丁目です。そして、今でも、皆さんの家族や皆さんの中には、この【桐生祇園祭】に関係している人がたくさんいます。例えば、去年の6月6日の昼休みに視聴覚室で、【桐生祇園祭】に欠かすことができない伝統芸能である【桐生祇園 囃子】の演奏会が行われましたが、この時演奏をしてくれた【桐生祇園お囃子連】のメンバーになっている北小児童は、【桐生祇園祭】の関係者ということになります。
- ◆ さて、大昔の話になりますが、平安時代の876年に、京都に「祇園神社」という名前の神社が建てられました。そこにお祀りされている神様は、「牛頭天王(ごずてんのう)」という神様です。こんな字を書きます。牛頭天王というのは、仏教を開いたお釈迦様やそのお弟子さんたちが住んでいた「祇園精舎」という建物の守り神だったので、仏教の守り神としてたいへん敬われている神様です。祇園精舎の守り神を祀ったお寺だから、「祇園神社」という名前になったわけです。そして、「京都の祇園神社に行き、「牛頭天王」をお参りすると病気になる。厄除けになる」という信仰が、日本全国に広がっていき、「牛頭天王」を神様として祀る神社が日本中につくられるようになっていきました。また、この京都の「祇園神社」が毎年7月に行う「祇園祭」というのが、【山車(だし)】と呼ばれる家のような舞台のような形をした物を曳き回して、京都の町中を賑やかに練り歩くということで全国的に有名になりました。
- ◆ お祭りの時に、たくさんの男の人達が綱をつけて引っ張り、町中を曳き回していくものを、一般的に「山車」と呼んでいますが、「山車」には【屋台(やたい)】とか【銚(ほこ)】とか【山(やま)】とか色々な種類があって、すべて形が違ってきます。なぜ違う形なのか、なぜ違う物が付いているのかについても、すべて意味(由来)があるそうですが、これらの「山車」に共通しているのは、お祭りの時に、天から神様に降りてきていただき、ずっとお祭りの場所に居ていただくために造られたということで、神様に喜んでいただけるように、華やかな彫刻や飾りがたくさん付けられているということです。
- ◆ そして、時が経っていくと、さらに神様に喜んでいただけるようにと、笛や太鼓でお囃子を演奏したり、踊りを踊ったりする舞台のような物が付けられるようになっていきます。さらに時が経っていくと、お囃子を演奏しながら、神様と一緒に町の中を移動して、町の人たちに喜んでもらえるようにと、屋根や車輪が取り付けられるようになり、見物人をもっと驚かせたい、隣の町の「屋台」や「銚」には負けたくないという競争心から、どんどん大きく豪華になっていったということです。
- ◆ したがって、「屋台」や「銚」と呼ばれる「山車」は、お祭りの間、神様に住んでいただく別荘のような物で、それに車輪が付いて、別荘ごと町の中を神様が移動していくというイメージです。それに対して、これもお祭りの時に見かける「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声を掛けながら担いでいく「お神輿」というのは、普段は神社にいらっしゃる神様を、神社から別の場所にお移しする時に乗っていただくタクシーのような物だとイメージしてください。
- ◆ ここからは桐生のことに話が移ります。今から400年以上前に、徳川家康の命令で桐生新町がつくられたという話を、去年の11月の全校朝会で話しましたが、その桐生新町の三丁目(現在の本町三丁目市営アパートがある場所)にあった「衆生院(しゅじょういん)」というお寺の境内に、「牛頭天王」を厄除けの神様としてお祀りする「天王社(てんのうしゃ)」という神社があって、そこで明暦2年(1656年)に、「天王祭礼(てんのうさいれい)」というお祭りが行われたという古い記録が残っています。その後、桐生新町が織物を扱う商業都市として発展してくると、この「天王祭礼」は一気に賑わっていくようになりました。
- ◆ 桐生新町というのは、現在の本町一・二・三・四・五・六丁目と横山町できていましたが、横山町を除いた6つの町は「惣六町(そうろくちょう)」と呼ばれて、毎年1町ずつ順番に「天王祭礼」の当番を務めていました。そして、この「天王祭礼」の当番のことを【天王番(てんのうばん)】、当番になる町を【天王番町(てんのうばんちょう)】と呼んでいます。もちろん、「天王番」の天王という字は、「天王社」の天王、「牛頭天王」の天王という字を使っています。
- ◆ こうして、最初の「天王祭礼」から約200年経った安政元年(1854年)になると、織物業で経済力がついてきた桐生新町の四丁目が、みんながびっくりするような巨大な「屋台」を完成させます。それがきっかけになって、惣六町ごとに大きな屋台がつけられたため、一丁目から六丁目のすべてに1台ずつ屋台が揃うことになりました。やがて、江戸時代も末期になる頃には、その6台の屋台の曳き回し方や集まった人達に見せるお芝居(歌舞伎や狂言)の面白さなどを、惣六町同士がライバル



【四丁目祇園屋台】

意識をもって競い合うようになり、「天王祭礼」の見物人は、桐生新町の中を行ったり来たりしながら、夜通しでお祭りを楽しんだと伝えられ、当時は「関東三大夜祭」として有名だったそうです。

- ◆しかし、1868年に明治維新が実現すると同時に、【神仏分離令】という法律が出されました。それまでの日本は、昔から日本にいらっしゃる八百万（やおよろず）の神様＝非常にたくさん神様と、インドから伝わってきた仏教の仏様を、両方とも敬って大切に信仰してきたのですが、「神仏分離令」によって、神社・神様とお寺・仏様をはっきりと区別しなければならぬということになりました。
- ◆では、お寺の境内に神社があった桐生新町三丁目はどうしたのでしょうか。お寺である「衆生院」をなくして、神社である「天王社」の方を残すことにしました。そして、「牛頭天王」が仏教の守り神であったことから、“天王社でお祀りする神様も替えましょう”ということになって、【素戔鳴命（すさのおのみこと）】という昔から日本にいらっしゃる神様をお祀りするということになりました。また、京都の「祇園神社」が、名前を「八坂神社」にかえたことが日本全国に広がっていき、桐生でも明治3年（1870年）に、「天王社」は【八坂神社】と名前をかえることになり、お祭りの名前も「天王祭礼」から【八坂祭典】になりました。
- ◆この間の文久2年（1862年）には、三丁目が「鉾」のてっぺんにく翁（お爺さん）の能面をつけた源頼朝の人形が付いている【翁鉾（おきなほこ）】を造りました。現在これは、本町三丁目商店街が平成18年にオープンした【翁蔵（おきなぐら）】に、組み立てられた状態で展示されています。
- ◆そして、これに影響を受けた四丁目は、明治8年（1875年）に【四丁目鉾（しちょうめほこ）】という高さ9mもある巨大な「鉾」を造りました。「四丁目鉾」には、八坂神社が祀っている神様であるく素戔鳴命（すさのおのみこと）の人形が付いていて、「四丁目祇園屋台」と一緒に、本町四丁目商店街が平成12年にオープンした【あーとほーる鉾座】に、組み立てられた状態で展示されています。「鉾」というのは、「屋台」と同じように、お祭りの時にお囃子を演奏しながら町中を曳き回すものですが、「てっぺんにシンボルが付いているものが鉾」だそうです。これがく素戔鳴命の人形です。
- ◆「あーとほーる鉾座」も「翁蔵」も本町通り沿いにありますので、皆さんも今度、どこにあるのか確認してみてください。私は6月に「あーとほーる鉾座」と「翁蔵」に行って、「四丁目祇園屋台」と「四丁目鉾」、「翁鉾」を実際に観てきましたが、どれもたいへん素晴らしい物でした。その時にいただいたパンフレットを、ポスターと一緒にく北小っ子通りに掲示しておきますので、「惣六町」がもっている6つの「屋台」がどんなものなのか。「鉾」というのがどんなものなのか。「鉾」に付いているく翁の能面をつけた源頼朝の人形とく素戔鳴命の人形がどんなものなのかを、ぜひ見ておいて欲しいと思います。



【翁鉾】



【翁の能面をつけた源頼朝の人形】



【四丁目鉾】



【素戔鳴命の人形】

- ◆話は変わりますが、最初に話をしたように、昭和39年から「桐生まつり」が行われるようになると、八木節音頭に合わせて櫓の周りで踊りを踊る方に人が集まるようになり、「八坂祭典」の方は段々と勢いがなくなっていってしまいました。桐生市の近代化とともに町の中は電柱と電線が多くなり、巨大過ぎる屋台と鉾は自由に動き回ることができなくなってしまい、出番がめっきり減ってしまったことが原因と云われています。
- ◆そんな中、明暦2年（1656年）に始まり、300年以上も続いてきた「天王祭礼」「八坂祭典」が衰退していくのを何とか食い止めたいと思っていた人達が、ついに行動を起こしました。平成元年には、本町四丁目が「祇園屋台」を復活させました。平成6年には、「八坂祭典」を【桐生祇園祭】という名前に変更しました。平成7年には、「翁鉾」と「四丁目鉾」の【曳き違い】を復活させました。それからも、惣六町と横山町で行う「桐生祇園祭」は着々と復興・進化していき、平成28年には【桐生祇園祭保存会】が設立されて、かつて「関東三大夜祭」といわれた頃の様子を再現するように努力しています。しかし、惣六町が1台ずつもっている6台の「祇園屋台」は、どれも間口（幅）が約8m、高さが約7m、奥行きが約6mという東日本最大級の大きさと豪華さを誇っているため、組み立てるだけでも3・4日はかかり、組立費用は100万円以上にもなってしまうということで、もう何十年も組み立てられることなく、しまったままになっている「祇園屋台」もあるそうです。
- ◆さて、最後になりますが、本町一丁目から六丁目の「惣六町」と横山町の人達が復活させた「桐生祇園祭」も、それを引き継いでいく人達（若者、子ども）がいないと、また勢いがなくなっていってしまうと、お年寄りの人達は心配しています。本町一丁目・二丁目・三丁目と横山町は、北小学校の学区の中にありますが、そこから北小に通っている人の人数は22人です。この22人の中から、桐生新町の人達の熱い思いがこもった「桐生祇園祭」の歴史と伝統を引き継いでいく人がたくさん出てくることを期待したいと思っています。
- ◆今年の「桐生祇園祭」の「天王番町」は本町二丁目、12年ぶりに「二丁目祇園屋台」を組み立てて屋台の曳き回し（【巡行（じゅんこう）】）を行うそうです。また、「桐生祇園祭」の中日に当たる8月5日土曜日の夕方には、今年も「翁鉾」と「四丁目鉾」の【曳き違い】が行われるそうですから、皆さんにはぜひ、八木節やジャンボパレードを楽しむと同時に、「桐生祇園祭」の美しさも観てほしいと思っています。

※ 写真の掲載については、地元関係者の許可を得てあります。また、ポスターについては、1区区長様より頂戴しました。

